
カードファイトヴァンガード～イメージと絆を繋ぐ物語～

永遠なる自由の剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カードファイトヴァンガード～イメージと絆を繋ぐ物語～

【Zコード】

Z2376Z

【作者名】

永遠なる自由の剣

【あらすじ】

ヴァンガードの世界に遊戯、十代、遊星、遊馬が迷いこんだ！
ヴァンガードと遊戯王のクロス物語です。

出合いと始まり

そう遠くない未来のお話、カードゲーム人口は数億人を越え今はカードゲームを専門とした学園まで存在していた。学園の名前はファイトアカデミア、ヴァンガードを専門とした学校である。

この学園に通う一人の少年がいた。

彼の名前は先導アイチ、櫂といつ最強のファイターとファイトすることを夢見る少年である。

(今日は良いことが起こりそうな気がする……)

そう思いアイチは教室へと急いだ。

教室に着くといつものメンバーがいた。

「おはようございますお兄さん…」

「おはようカムイ君!」

アイチにカムイと呼ばれたこの少年は葛木カムイ。

「やけに上機嫌じゃない?アイチ」

次に話し掛けて来たのは戸倉ミサキ。

この一人はアイチと同じチーム、Q4のメンバーである。

「なんか今日は良いことが起こりそうな気がして」

「ぐだらんイメージだな…………」

「権君…………」

アイチたちが話していた場所に一人の青年が現れた。彼の名前は権トシキ、この世界のヴァンガードチャンピオンと双璧とも呼ばれていてアイチたちと同じQ4のメンバーである。

「権のやろー、頭にくるな！」

「カムイ君落ち着いて…………」

怒り狂つたカムイをアイチが止めていると、

ガツシャーン！

校庭の方からすごい音がした。

「な……なんだ！？校庭の方からか！？」

「行つてみよー！」

「待つて、アイチ！」

権を除く3人は校庭を目指して駆けていった。
3人が校庭に着くとそこは土煙が上がっていた。

「ゲホゲホ…………何が起きたんだ？」

「わからないけど氣をつけてカムイ君」

「大丈夫ですよ兄さん」

カムイがそういつた時、土煙の向こうから人が4人現れた。

「遊星……」はどこだ？」

「わからない…俺らの世界ではないみたいだな」

遊星と呼ばれたその人が答える。

「な……人が出て来たあ！？」

カムイは驚きアイチの後ろに隠れる。

土煙が晴れるとそこにはどこかの制服を着て、首から見たこともないネックレスをしている青年と先ほど遊星と呼ばれたらしきクールだがいびつな髪型をしている青年、何らかの鍵らしきものを首から下げている男の子、赤いブレザーを着ている青年が立っていた。

「貴方方は一体誰ですか…………？」

アイチが恐る恐る聞いた。

すると先ほど遊星と呼ばれた青年が答えた。

「俺の名前は不動遊星だ…俺たちは世界が崩壊するとアポリアから告げられ、その未来を代えるためにDホイールに乗つて遊戯さん、十代さん、遊馬さんを迎えて時代を越えていたんだ。」

「ちょっと待て……時代を越えて来た？そんなバカな話しあるのか？」

ミサキが質問した。すると、遊星は手袋を外し癌を見せて話した。

「」の竜の癌の力で時代を越えられるんだ。そして赤き竜に導かれて来てみたらこんな場所についたんだ

「そんなことがあるんですか……といひでアーニリストとは何ですか？」

アイチは疑問をぶつけた。すると鍵のようなペンダントをした少年が答えた。

「遊戯王カードで戦う決闘者の事だ！お前ら知らないのかよ！？ほら…」

そういうその少年はデッキケースからカードを取り出したがびっくりした声を上げた。

「俺のデッキが訳のわからないカードになっちゃった……」

「な！？」

残りの3人もデッキを確認してみると全員のカードも見たことがないカードになっていた。

「なんだこのカードは……」

「ヴァンガードを知らないのか？」

「……」「ヴァンガード！？」

4人は驚きの声を上げた。

「ルールを教えてやるよ……」

「権君」

権がいつのまにかアイチの横に立っていた。

「権君戦つの？」

「ああ、あいつらの持っているカードが気になる…………それに話すより簡単にわかりえる」

権がそういうと見たこともないネックレスをした青年が答えた。

「面白そだな、四の五の言ひより分かりやすい…………良いゼテユーハルだ」

「僕も戦つてみたい！」

「私も興味がわいた。私も戦いたい」

「俺様もだ」

アイチ、ミサキ、カムイも戦いたいと言った。

「じつも4人だしちょうどいい、よろしく頼む

こうしてアイチたちQ4と遊星ら4人によつてファイトをすることになったのだった。

出合こと始まつ（後書き）

次回は遊戯ＶＳ櫂君です
最強同士の戦いです

最強VS最強 前編

30分後、遊星たちは『テック』を見て個々の能力を覚えた。そして櫂と見たこともないネックレスをした青年とのファイトが始まろうとしていた。

「俺の名前は武藤遊戯……あー、面白い勝負をしようぜー。」

「俺の名前は櫂トシキだ……お前は初心者だから説明しながら戦つてやるよー。」

お互に自己紹介をし握手をしてファイトを始めようとしていた。

「よし！始めるぞー！イメージしろ……今の俺たち一人は地球上によく似た惑星『クレイ』に現れた靈体だ……このか弱い存在の俺たちに与えられた能力がふたつある……ひとつは『コール』！この惑星の住人やモンスターたちを呼び寄せる能力だ！　俺たちが呼び寄せる事ができるのは契約したものたち……」

そう言い櫂は『テック』を手に持ち話を続けた。

「お互いの『テック』に集められたカードたちだけだ！」
そして櫂は『テック』を置いた。

「そしてふたつめは靈体である自分を呼び寄せたモンスターらに憑依させる能力！『ライド』！！そしてライドした俺たちを先導者……『ヴァンガード』と呼ぶ！先ずはグレード0のカードを一枚選ん

でそれを場に伏せな！」

櫂はデッキからカードを一枚選んで伏せた。遊戯も同じく一枚選び置いた。

「最初の俺たちが最初にライドできるのはこのグレード0だけだ

「なるほどな」

「この伏せたカードが開かれたらそれは他の誰でもない自分自身となる！自らがヴァンガードとなつて契約したものたちを率いて戦うんだ！さあシャッフルしたデッキからカードを5枚引きな、それが俺たちが呼び寄せる準備の整つたものたちだ」

櫂はシャッフルしたデッキからカードを引きながら言つ。遊戯も同じく引く。

「よし！同時にこのファーストヴァンガードを開いたらゲームスタートだ！行くぞ！」

「来な！」

櫂と遊戯は伏せたファーストヴァンガードを開きながら同時にこういふ

「「スタンダップヴァンガード！..」」

「俺はアンバードラゴン晩にライドー」

「俺は見習いの黒魔術師にライド！」

「これでお互いヴァンガードとして惑星クレイの地に立つた！先ず

は俺の先攻だ…カードを一枚引く!」

そう言い権はカードをデッキから引いた。

「自分のターンには一度だけヴァンガードを更なる上級グレードにライドする事ができる…『ライドフェイズ』がある!」

権は手札からカードを一枚選び、ファーストヴァンガードの上に置いた。

「俺はこのカードにライドする!! ライド・ザ・ヴァンガード!!! グレード1、アンバードラゴン^{白日}だ! そしてアンバードラゴン^暁のスキルを発動する! デイライトがドーンにライドしたとき、デッキからアンバードラゴン^{黄昏}を一枚手札に加えデッキをシャッフルする事ができる…そしてアンバードラゴンデイライトのスキル! ソウルにアンバードラゴンドーンが有るならヴァンガード時だけだがこのユニットのパワーを+2000!」

元々のパワーが6000だったデイライトは8000となる。

「さらにヴァンガードは自身のグレード以下のカードをコールして従える事ができる…このカードを『リアガード』と呼ぶ!」

権はヴァンガードの後にカードを置いた。

「コール・ザ・リアガード!!! グレード1のアンバードラゴンデイライト!! さらにデイライトのスキル! デイライトがリアガードにコールされたとき、手札のグレード3を捨てデッキからアンバードラゴン^{イクリプス}蝕^{イクリブス}を手札に呼べる!」

権はデッキからアンバードラゴンイクリプスを手札にえた。

「これで俺の自陣には2体！アタック……は先攻した最初のターンはできない、ここで俺のターンを終了する」

「俺のターン！」

遊戯はデッキからカードを引いた。

「俺はこのカードにライドするぜ！ライド・ザ・ヴァンガード！！！ブラックマジックカーテン！」

遊戸も見習いの黒魔術師の上にカードを置いた。

「見習いの黒魔術師のスキル！ブラックマジックカーテンがこのコッドにライドしたときデッキからブラックマジシャンを手札に加える！そしてブラックマジックカーテンのスキル！ソウルに見習いの黒魔術師が有るときパワー + 2000だ！」

ブラックマジックカーテンの攻撃力も6000なので櫂のアンバードラゴンティライトと同じ攻撃力となつた。

「さりに」「ホール・ザ・リアガード！！！ブラックマジックカーテン！このカードは櫂のティライトと同じようなスキルを持つ……」

「何だと？」

「手札のグレード3を捨てデッキからカオスマジシャンズドラゴンを手札に加える……」

遊戸も櫂と同じくデッキからカードを手札に加えた。
それを見ていたアイチが

「凄い……遊戯さん初めてなのにもうツッキ使っこなしてね……」

「当たり前だろ？遊戯さんは俺らの世界の初代デュエルチャンピオンなんだから！」

「君は？」

「俺の名前は遊城十代、よろしく

十代と名乗った少年が握手を求めてきた。

「はじめまして！僕の名前は先導アイチです。遊戯さんってそんなに強い方だったんですね！」

アイチは十代と握手をし、率直な感想を述べた。

「もちろん！あの人はどんな強敵にも屈指す戦い抜いてきた凄い人なんだぜ！」

アイチは十代の話を聞いて思つ。（今のは本当なら櫂君が満足して戦える相手だね）と。

「まさか同じ能力対決になるとはな……2体でアタックされたら俺は歯が立たない……お前の方が圧倒的に有利だが……アタックするかい？」

「おう……」

「よし良いぜ！攻撃するコニットをレストし宣言しなー！」

遊戯はユニットをレストしながら宣言する。

「リアガードのブラックマジックカードでヴァンガードをブースト…！…ブラックマジックカードでアタック…！」

遊戸の攻撃が櫂にヒットした。

「やられたよ…お前のアタックは置いたにヒットした…！…ヴァンガードがアタックするとき、デッキの一番上を確認して手札に加える事ができる…そして確認したカードがトリガーコニットだった場合、そのトリガーの力を自陣のユニットに与える事ができる…さらにヴァンガードに攻撃がヒットするとデッキのカードが1枚…契約が解除戻れ言でヴァンガードの元から去っていく…まるで危険を感じて逃げ出したようだな…アタックされてめくつたカードがトリガーコニットの場合でもそのトリガーの力を使うことができる…そして…契約を解除されたものが6体を越えたとき…すべてのカードとの契約は解除され俺たちは靈体に戻り消滅する。つまりそのプレイヤーの敗けだ…理解できたな？授業は終わりだ！行くぞ！」

「来な…」

ここから櫂と遊戸の本当の戦いが始まるのだった。

「マイターン、ドロー…俺はアンバードラゴンダスクにライドする…！アンバードラゴンダスクのスキル！ソウルにアンバードラゴンデイライトがあるときパワー+1000だ！」

アンバードラゴンダスクのパワーが10000となつた。さらに櫂は「ラーヴァアームドラゴン、フレイムエッジドラゴンをホール！そしてフレイムエッジドラゴンでヴァンガードをアタック！！」

「ノーガード、ダメージトリガー・チェック……ゲット…ドロートリガード…ヴァンガードにパワー+5000、そしてドロー…」

「フレイムエッジドラゴンのスキル！」のコニットのアタックがヒットしたときソウルチャージできる！ソウルをチャージし、次だ！アンバードラゴンデイライトのブースト…！アンバードラゴンダスクでヴァンガードをアタック…！ダスクのスキル！ダスクがヴァンガードをアタックするとき、パワー+2000される！」

ダスクはデイライトのブーストと皿身のスキルでトータルパワー18000となる。

「ノーガードだ！」

櫂のアタックがヒットし、カードが1枚ダメージゾーンに送られた。

「ドライブトリガーチェック…トリガー無しだ…ターンを終了する」

まだユニットが残っていたがパワーが足りずアタックできなかつた。そして遊戯のターンになる。

「俺のターン！強いな君は…こんなに熱くなれた戦いは久しぶりだぜ！さあ、俺も本氣で行くぜ！俺の最強の僕！ライド！ブラックマジシャン！！さらにコール！ブラックマジシャンガール！ブラックマジシャンのスキル！カウンターブラスト！」

そういって遊戯はダメージゾーンのカードを2枚裏返す。

「ソウルに見習いの黒魔術師、ブラックマジックカーテンが有ると相手のリアガードを2体退却させる…ブラックマジック…！」

權の場のラーゴアームドラゴン、フレイムエッジドラゴンが退却させられた。

(なかなかやるな。しかもまだなにか隠し持つてるな)

「さらに行くぜ！リアガードのブラックマジシャンガール、ブラックマジックカーテンをソウルに異動することでこのカードはスペリオルライドできる！俺の新たな仲間！カオスマジシャンズドラゴンにスペリオルライド！」

「ほう？なかなか面白いな！それでこそ燃える！お前の本気見せてみろ！」

「カオスマジシャンズドラゴンのスキル！このカードはソウルにブラックマジシャン、ブラックマジシャンガール、ブラックマジックカーテンがあるときカオスマジシャンズドラゴンのパワー + 200 0だ」

もともとのパワーは10000なので12000となる。

「せりに手札を一枚捨てテックからグレード2以下のマジシャンユニットをコールできる！俺はテックからカオスマジシャンをコールする！！カオスマジシャンはカオスマジシャンズドラゴンが有るときパワー+2000だ！」

カオスマジシャンのパワーも10000であるためパワーは12000となる。

「だがカオスマジシャンはカオスマジシャンズドラゴンがないとパワー-5000だ…そしてカオスマジシャンでアタック…！」

「ガーディアンコール！ブレイジングコアドラゴンをコール」

「アタックが通らないだと…？」

遊戯は驚きの声を上げた。

「自分の手札から一度だけユニットをコールしてヴァンガードを守る事ができる！ガーディアンとしてコールされたユニットはクローズステップ時にドロップゾーンに送られる」

「やつぱり櫂君はそこでガーディアンを教えるんだね…」
アイチが自分の時の事を思いだし呟いた。

「実戦の方が分かりやすいだろ…」

「確かに…ならガーディアンのガード力を越えるパワーでアタックすればいいんだろ！カオスマジシャンズドラゴンでヴァンガード

をアタック！－ツインドライブ、ファースト…ゲットクリティカルトリガー！セカンド…スタンドトリガーだ！パワーをカオスマジシャンズドラゴンとカオスマジシャンに、そしてカオスマジシャンズドラゴンにクリティカル＋1だ！」

アタックはヒットし櫂のテッキからカードが2枚ダメージゾーンに置かれた。

「さらにカオスマジシャンでアタック！－！」

「ノーガードだ…」

「これで櫂のターンは終了だ」

「これで櫂のダメージは4となつた。

「マイターん、スタンダンドドロー－俺はアンバードラゴンイクリップスにライド！イクリップスのスキル－ソウルにアンバードラゴンダスクが有るときパワー+1000だ！」

イクリップスのパワーが11000になる。

「さらにドラゴニックオーバーロード、デュアルアクスアーケドラゴン、バーをホール！ドラゴニックオーバーロードのカウンターブラスト！オーバーロードにパワー+5000だ！」

櫂は一気に攻撃を仕掛けた。

「オーバーロードでカオスマジシャンにアタック！－エターナルフレイム！－」

「ノーガード」

オーバーロードのアタックがヒットしオーバーロードがスタンディングした。

「な……シリーズアタック！？クソ」

「再度オーバーロードでアタック！エターナルフレイム！！」

「エボナでガードする！！」

オーバーロードの攻撃は防がれてしまった。だが櫂の攻撃は止まらない。

「アンバードラゴンディライトのブースト！！アンバードラゴンクリップスでアタック！！」

「ガードはしない」

「ツインドライブ、ファースト…」

一枚目にはトリガーはなかつた。

「セカンド…ゲットクリティカルトリガー！イクリップスにクリティカル+1、アクスにパワーを与える！」

遊戯のダメージゾーンにカードが2枚送られた。

「バーのブースト！！アクスでアタック！！アクスのスキル、相手

リアガードが2体以下のときパワー + 3000だ！

アクスのトータルパワーが26000となる。

「高過ぎるー、ノーガードだ」

遊戯のダメージが5となつた。

「あと1ダメージだな……俺のターンは終了する」

「俺のターンだ！ カオスマジシャンズドラゴンの最後のスキル！ カウンター ブラスト！」

ダメージを3枚裏返した。

「パワー + 10000、クリティカル + 1だ！ だがこのスキルはソウルにブラックマジシャン、ブラックマジシャンガール、ブラックマジックカーテンがありダメージが4以上ではないと使えないが十分だ！ さらにブラックマジシャン、ブラックマジックカーテンをコール！ そしてアタック！！ カオスマジシャンズドラゴンでアタック！！！」

このアタックがヒットすると櫂は敗けてしまつのに櫂は焦らなかつた。

「バリイで完全防御だ！」

「ヒットしないだと！？ シンドライブ… フースト… セカンド、ゲットクリティカルトリガー！ 効果はすべてブラックマジシャンへ！」

ツインドライブで引いた一枚目はグレード3だった。

クリティカルトリガーの能力でブラックマジシャンの攻撃力は14000となつた。

「ブラックマジックカーテンのブースト…！ブラックマジシャンでアタック！！」

「ラクシャでガードだ！」

「ターン終了だ…」

遊戯はこのターンで櫂を倒せなかつた。そして遊戸はもう次のターンは来ないと悟つた。

「ファイナルターン！」

「何…？」

ファイトを見ていた十代は驚きの声を上げ、アイチたちは遂にかと思つた。

「ブレイジングフレアドラゴンにライド！そしてジョカをコール！そしてブレイジングフレアドラゴンのソウルブースト！相手ユニットを一體退却させる！」

遊戸の場のブラックマジシャンが姿を消した。

「そしてジョカ、ブレイジングフレアドラゴンのスキル！相手ユニットが退却したときパワー+3000だ！」

「何だと…？」

「ドラゴン・クオーバーロードのアタック！」

アタックがヒットしダメージチェックに入る。

「ゲット、スタンドトリガーだ！パワーをヴァンガードに、ブラックマジックカーテンをスタンド」

「アンバードラゴンデイライトのブースト！…ブレイジングフレアドラゴンでアタック！…」

「ブラックマジックカーテン、エポナでガード！…これで防げるはずだ！」

「ツインドライブ、ファースト…ゲットドローントリガー！セカンド…ゲットクリティカルトリガー！効果のすべてはアクスに！…そして1毎夜ドロー…そしてデュアルアクスアークドラゴンでアタック！」

もう遊戯にはガードできるカードがなかった。

「ノーガード…」

「双斧に刻まれし恐怖、絶望……永の苦痛に悶えて眠れ！…デュアルアクスボンバー！…」

デュアルアクスのアタックがヒットし、遊戯のダメージが7となり遊戯は櫂に敗北してしまったのだった。

「久しぶりに面白いファイトだったぜ……遊戯、ルームをしつかり

覚えたらお前は今よりもっと強くなる…その時が楽しみだ

「もちろん絶対に強くなつてやる…そして櫂、君と戦い必ず勝つてみせる！」

そういうお互いに握手をした。

「あの遊戯さんに勝つ何てあこつは一体何者何だ！？それにしてもすごかつたな！今のを見たら俺もやりたくなつてしまつたぜ！なあアイチ、俺とファイトしよう！」

十代が興奮しきつてアイチにそつ告げた。
アイチは戸惑つたが

「もううんだよ…たあファイトしよう！」

そういうて二人は櫂と遊戯が戦つた場所へと移動するのだった。

そして場所に着きテッキを置いて叫んだ。

「「スタンダップヴァンガード…！」」

最強V/S最強後編（後書き）

次回はアイチV/S十代です。
ゴニーットの設定どうじよつかな（（（（（・・・）

「マイターン、ドロー…俺はアンバードラゴンダスクにライドする…！アンバードラゴンダスクのスキル！ソウルにアンバードラゴンデイライトがあるときパワー+1000だ！」

アンバードラゴンダスクのパワーが10000となつた。さらに櫂は「ラーヴァアームドラゴン、フレイムエッジドラゴンをホール！そしてフレイムエッジドラゴンでヴァンガードをアタック！！」

「ノーガード、ダメージトリガー・チェック……ゲット…ドロートリガード…ヴァンガードにパワー+5000、そしてドロー…」

「フレイムエッジドラゴンのスキル！」のコニットのアタックがヒットしたときソウルチャージできる！ソウルをチャージし、次だ！アンバードラゴンデイライトのブースト…！アンバードラゴンダスクでヴァンガードをアタック…！ダスクのスキル！ダスクがヴァンガードをアタックするとき、パワー+2000される！」

ダスクはデイライトのブーストと皿身のスキルでトータルパワー18000となる。

「ノーガードだ！」

櫂のアタックがヒットし、カードが1枚ダメージゾーンに送られた。

「ドライブトリガーチェック…トリガー無しだ…ターンを終了する」

まだユニットが残っていたがパワーが足りずアタックできなかつた。そして遊戯のターンになる。

「俺のターン！強いな君は…こんなに熱くなれた戦いは久しぶりだぜ！さあ、俺も本氣で行くぜ！俺の最強の僕！ライド！ブラックマジシャン！！さらにコール！ブラックマジシャンガール！ブラックマジシャンのスキル！カウンターブラスト！」

そういって遊戯はダメージゾーンのカードを2枚裏返す。

「ソウルに見習いの黒魔術師、ブラックマジックカーテンが有ると相手のリアガードを2体退却させる…ブラックマジック…！」

權の場のラーゴアームドラゴン、フレイムエッジドラゴンが退却させられた。

(なかなかやるな。しかもまだなにか隠し持つてるな)

「さらに行くぜ！リアガードのブラックマジシャンガール、ブラックマジックカーテンをソウルに異動することでこのカードはスペリオルライドできる！俺の新たな仲間！カオスマジシャンズドラゴンにスペリオルライド！」

「ほう？なかなか面白いな！それでこそ燃える！お前の本気見せてみろ！」

「カオスマジシャンズドラゴンのスキル！このカードはソウルにブラックマジシャン、ブラックマジシャンガール、ブラックマジックカーテンがあるときカオスマジシャンズドラゴンのパワー + 200 0だ」

もともとのパワーは10000なので12000となる。

「せりに手札を一枚捨てテックからグレード2以下のマジシャンユニットをコールできる！俺はテックからカオスマジシャンをコールする！！カオスマジシャンはカオスマジシャンズドラゴンが有るときパワー+2000だ！」

カオスマジシャンのパワーも10000であるためパワーは12000となる。

「だがカオスマジシャンはカオスマジシャンズドラゴンがないとパワー-5000だ…そしてカオスマジシャンでアタック…！」

「ガーディアンコール！ブレイジングコアドラゴンをコール」

「アタックが通らないだと…？」

遊戯は驚きの声を上げた。

「自分の手札から一度だけユニットをコールしてヴァンガードを守る事ができる！ガーディアンとしてコールされたユニットはクローズステップ時にドロップゾーンに送られる」

「やつぱり櫂君はそこでガーディアンを教えるんだね…」
アイチが自分の時の事を思いだし呟いた。

「実戦の方が分かりやすいだろ…」

「確かに…ならガーディアンのガード力を越えるパワーでアタックすればいいんだろ！カオスマジシャンズドラゴンでヴァンガード

をアタック！－ツインドライブ、ファースト…ゲットクリティカルトリガー！セカンド…スタンドトリガーだ！パワーをカオスマジシャンズドラゴンとカオスマジシャンに、そしてカオスマジシャンズドラゴンにクリティカル＋1だ！」

アタックはヒットし櫂のテッキからカードが2枚ダメージゾーンに置かれた。

「さらにカオスマジシャンでアタック！－！」

「ノーガードだ…」

「これで櫂のターンは終了だ」

「これで櫂のダメージは4となつた。

「マイターん、スタンダンドドロー－俺はアンバードラゴンイクリップスにライド！イクリップスのスキル－ソウルにアンバードラゴンダスクが有るときパワー+1000だ！」

イクリップスのパワーが11000になる。

「さらにドラゴニックオーバーロード、デュアルアクスアーケドラゴン、バーをホール！ドラゴニックオーバーロードのカウンターブラスト！オーバーロードにパワー+5000だ！」

櫂は一気に攻撃を仕掛けた。

「オーバーロードでカオスマジシャンにアタック！－エターナルフレイム！－」

「ノーガード」

オーバーロードのアタックがヒットしオーバーロードがスタンディングした。

「な……シリーズアタック！？クソ」

「再度オーバーロードでアタック！エターナルフレイム！！」

「エボナでガードする！！」

オーバーロードの攻撃は防がれてしまった。だが櫂の攻撃は止まらない。

「アンバードラゴンデイライトのブースト！！アンバードラゴンクリップスでアタック！！」

「ガードはしない」

「ツインドライブ、ファースト…」

一枚目にはトリガーはなかつた。

「セカンド…ゲットクリティカルトリガー！イクリップスにクリティカル+1、アクスにパワーを与える！」

遊戯のダメージゾーンにカードが2枚送られた。

「バーのブースト！！アクスでアタック！！アクスのスキル、相手

リアガードが2体以下のときパワー + 3000だ！」

アクスのトータルパワーが26000となる。

「高過ぎるー。ノーガードだ」

遊戯のダメージが5となつた。

「あと1ダメージだな……俺のターンは終了する」

「俺のターンだ！ カオスマジシャンズドラゴンの最後のスキル！ 力
ウントーブラスト！」

ダメージを3枚裏返した。

「パワー + 10000、クリティカル + 1だ！ だがこのスキルはソ
ウルにブラックマジシャン、ブラックマジシャンガール、ブラック
マジックカーテンがありダメージが4以上ではないと使えないが十
分だ！ さらにブラックマジシャン、ブラックマジックカーテンをコ
ール！ そしてアタック！！ カオスマジシャンズドラゴンでアタック
！！」

このアタックがヒットすると櫂は敗けてしまつのに櫂は焦らなかつ
た。

「バリイで完全防御だ！」

「ヒットしないだと！？ ツインドライブ…ファースト…セカンド、
ゲットクリティカルトリガー！ 効果はすべてブラックマジシャンへ
！」

ツインドライブで引いた一枚目はグレード3だった。

クリティカルトリガーの能力でブラックマジシャンの攻撃力は14000となつた。

「ブラックマジックカーテンのブースト…！ブラックマジシャンでアタック！！」

「ラクシャでガードだ！」

「ターン終了だ…」

遊戯はこのターンで櫂を倒せなかつた。そして遊戸はもう次のターンは来ないと悟つた。

「ファイナルターン！」

「何…？」

ファイトを見ていた十代は驚きの声を上げ、アイチたちは遂にかと思つた。

「ブレイジングフレアドラゴンにライド！そしてジョカをコール！そしてブレイジングフレアドラゴンのソウルブースト！相手ユニットを一體退却させる！」

遊戸の場のブラックマジシャンが姿を消した。

「そしてジョカ、ブレイジングフレアドラゴンのスキル！相手ユニットが退却したときパワー+3000だ！」

「何だと…？」

「ドラゴン・クオーバーロードのアタック！」

アタックがヒットしダメージチェックに入る。

「ゲット、スタンドトリガーだ！パワーをヴァンガードに、ブラックマジックカーテンをスタンド」

「アンバードラゴンデイライトのブースト！…ブレイジングフレアドラゴンでアタック！…」

「ブラックマジックカーテン、エポナでガード！…これで防げるはずだ！」

「ツインドライブ、ファースト…ゲットドローントリガー！セカンド…ゲットクリティカルトリガー！効果のすべてはアクスに！…そして1毎夜ドロー…そしてデュアルアクスアークドラゴンでアタック！」

もう遊戯にはガードできるカードがなかつた。

「ノーガード…」

「双斧に刻まれし恐怖、絶望……永の苦痛に悶えて眠れ！…デュアルアクスボンバー！…」

デュアルアクスのアタックがヒットし、遊戯のダメージが7となり遊戯は櫂に敗北してしまつたのだった。

「久しぶりに面白いファイトだったぜ……遊戯、ルームをしつかり

覚えたらお前は今よりもっと強くなる…その時が楽しみだ

「もちろん絶対に強くなつてやる…そして櫂、君と戦い必ず勝つてみせる！」

そういうお互いに握手をした。

「あの遊戯さんに勝つ何てあこつは一体何者何だ！？それにしてもすごかつたな！今のを見たら俺もやりたくなつてしまつたぜ！なあアイチ、俺とファイトしよう！」

十代が興奮しきつてアイチにそつ告げた。
アイチは戸惑つたが

「もううんだよ…たあファイトしよう！」

そういうて二人は櫂と遊戯が戦つた場所へと移動するのだった。

そして場所に着きテッキを置いて叫んだ。

「「スタンダップヴァンガード…！」」

最強V/S最強後編（後書き）

次回はアイチV/S十代です。
ゴニーットの設定どうじよつかな（（（（（・・・）

HERO VS 光の騎士団（前書き）

E-HEROがチートです（笑）

HERO VS 光の騎士団

十代とアイチのファイトが始まった。

「ばーぐるにライドします」

「俺はハネクリボーにライドするぜ！よろしくな、ハネクリボー！」

(クリクリー)

十代の問いかけにまるでハネクリボーが答えているように思えた。

その光景を見ていた櫂は驚く。

(まさかアイツもあの力を？…………まさか)

「僕の先攻です。ドローー！僕はマロンにライドします！そしてばーぐるのスキル！」

ソウルにあつたばーぐるがリアガードサークルにコールされる。

「ばーぐるは他のロイヤルバラディンがライドしたとき、リアガードサークルにコールされます。ターンエンドです」

「よし！俺のターンだな。ワクワクが止まらないぜ！行くぜ！俺はE HERO フュザーマンにライド！そしてハネクリボーのスキルだ！ハネクリボーはE HERO にライドされたとき、手札に戻す事ができるー」

「そんなスキル聞いたことないぞ！？」

Q4のメンバーは驚いた。

無理もない、今までにライドされたカードが手札に戻るカードなど存在していないのだから。

「後衛にE—HERO バーストレーディをコール！そしてブースト！—フェザーマンでアタック！」

フェザーマンとバーストレーディの攻撃力は7000なので合計14000となる。

「ドライブチェック！トリガーはないぜ」

「ダメージチェックです……」

アイチはダメージ食らつた。

「僕のターン！僕はふるうがるを『ール！』

ピンク色の可愛らしいハイドックがコールされた。

「さらにはーぐがるのスキル！テッキから未来の騎士リューをコールします。そしてリューのカウンターブラスト！」

アイチはぱーぐがる、リュー、ふるうがるをソウルに送る。そしてアイチは高らかに宣言する。

「立ち上がり！僕の分身！ブラスターブレード！！」

ロイヤルパラディン光の剣、ブラスターブレードが姿を現す。

その姿は凜々しく、十代のHEROを圧倒するプレッシャーを放つていた。

「すげえ、すげえよ！アイチ！カッコいいぜ！」

十代は初めて見るブラスター刃に感動していた。

「ブラスター刃の後衛についんがるを『ホール！』

ブラスター刃の相棒、ういんがるがホールされる。

「ういんがるのブースト！…ブラスター刃でアタック！…さらにういんがるのスキル、ういんがるはブラスター刃をブーストしたとき、ブラスター刃にパワー + 4000 します！」

これでトータルパワーは 19000 となる。

「ノーガードだ！」

「ドライブチェック！トリガーはなし……」

「俺のターン！アイチがカッコいいの見せてくれたからな 僕も見せてやるよ！E HERO バブルマンにライド！そしてバブルマンのスキル！カウンター ブラスト！だ！手札からカードを 2 枚捨て デッキからカードを 2 枚ドロー！」

「手札増強……」

「そして俺はドロップゾーンに送られたネクロダークマンのスキル

を発動！ネクロダークマンがドロップゾーンにあるとき一度だけグレード3にスペリオルライドできる！」

「…………？」

このスキルにはさすがに全員驚いた。

ほとんどノーコストでグレード3になれるのだから。

「だがネクロダークマンはデッキに一枚しか入れられず、しかも一度しか使用出来ないけどな……これが俺のフェイバリットカードだぜ！こい！E HEROネオス！！」

ネオスは十代が数々の敵と戦ったときに十代と共に戦い抜いた十代の切り札。

「手札からノーグランモールをコール！そしてグランモールをソウルに送り、コンタクトフェュージョン！！俺はエクストラデッキより、E HEROグランネオスにユニゾンライド！！」

「なー？」

「わりいわりい……お前らの世界にはないんだよな、こうこうの」

そういうと十代は説明してくれた。

「俺のユニゾンライドってこいつのはユニゾンコニッシュのライド条件をクリアしたときにエクストラデッキ、まあ今あるデッキ以外のデッキだ…そこからスペリオルライドできるんだ！俺はユニゾンライドの2つの方法の内の1つ、コンタクトフェュージョンを今やつただ

「十代は融合の使い手だからな」

遊戯がみんなに話す、十代は元の世界で融合という力で何度もペインチを切り抜けた。

「俺のはユニゾンだけど遊星と遊馬も、もちろん遊戸さんも方法は違つけど俺と同じことが出来るんだぜー！」

Q4のメンバーには驚きの連発である。
自分たちにもこの力が使えたら無敗に近いだろう。

そして櫂は考える

（ここいつも全員と戦いたい！）と。

「アイチー！ここからが本番だぜ！E—HEROのグラランネオスのスキル！相手コニットを1体『テッキ』に戻す！ういんがるを『テッキ』へ！」

「くつ……」

（強い！櫂君と同じくらい強い！けど勝ちたい！）

「バーストレイディのブースト！…グラランネオスでアタック！…

「ノーガードです」

「ツインドライブ！ファースト…セカンド！ゲットヒールトリガー！ダメージを回復してパワーをグラランネオスに」

アイチのダメージが2となるが、十代のダメージは0、圧倒的にア

イチが不利である。

「ターンの終わりにグラランネオスはエクストラデッキに戻り、ソウルのネオスにライドし、グラランモールはデッキに帰る……ターンエンド！」

グラランネオスの姿が消え、ネオスに戻る。

どうやらコントラクトフュージョンは1ターンしか持たないようだ。

「僕のターン！ 降臨せよ、騎達の主！ ライド！ ……騎士王アルフレッド！」

アイチの切り札にして騎士達の王、アルフレッドが姿を現す。

「ギャラティン、ぽーんがる、あるがるを『ホール！ そしてぽーんがるのスキル！ カウンターブラスト！ デッキからソウルセイバー・ドラゴンを手札に加えます。そしてソウルセイバードラゴンをコール！』

「お兄さんソウルセイバーをひとつしてリアガードなんかに！」

「次にライドしてもリアガードが足りないからな……アタッカーを増やすためにコールしたんだろつ」

櫂が解説をしてくれた。

「ソウルセイバードラゴンでネオスをアタック！」

「ノーガードだ！」

ダメージチェックにトリガーはなし。

「アルフレッド！…アルフレッドはリアガードのロイヤルパーティ
ンの数×2000がパワーに加算されます！」

よつて今のアルフレッドはパワー16000である。

「ノーガード」

「ツインドライブ！ファースト…セカンド！ゲットクリティカルト
リガード！クリティカルはアルフレッドへ！パワーはギャラティン！」

さらに十代に2ダメージが追加された。

「ギャラティン！」

「ノーガード」

これで十代のダメージは5、次を受けたら敗けである。

「おもしれえよアイチ！俺も答える！俺のターン！ノーエアハミング
バードを『ール！そしてコンタクトフュージョン！』

先程同様、エアハミングバードがソウルに置かれ、エクストラデッ
キから

「E—HEROエアーネオスユニゾンライド！！エアーネオスは
相手とのダメージの差×2000パワーアップだ！そしてエアーネ
オスでアタック！！」

「防ぎ切れない！」

「ツインドライブ！ ファースト… ゲットクリティカルトリガー！ セカンド！ ゲットクリティカルトリガー！ パワーは全てエアーネオスに！」

これでアイチのダメージも5になつた。

またエアーネオスはデッキに戻り、ネオスだけが場に残つた。

「このターンで決めます！」

「受けて立つぜ！」

「マロンをソウルセイバーの後衛にコール！ そしてアルフレッドのカウンターブラスト！ デッキからゼノンをコール！ ゼノンはデッキの一番上を巡り、それがヴァンガードと同じグレードならスペリオルライドできる…！」

アイチは祈るようにデッキをめくる。
そして……

「聖なる竜よ、出でてその神秘な力を奮え！ ソウルセイバードラゴンにスペリオルライド…！ そしてソウルブラスト！ ソウルセイバードラゴン、ギャラティン、ゼノンにパワー+5000…！」

「アイチ！ お前は本当にすげえよ…！」

「これが僕の全開です。ギャラティンでアタック…！」

「悪いなアイチ！俺は敗けない。来い！相棒、ハネクリボーゲード！！ハネクリボーのスキル！ガーディアンにコールされたとき、カウンターブラスト③と手札のE—HEROを2体捨てることで俺のヴァンガードはこのターンダメージを受けない！！」

「そ……そん……な……」

「あと少しだつたな」

結局ツインドライブでトリガーはなかつた。

「俺のターン！手札のN—フレアスカラベ、N—グランモールをコール！そしてコンタクトフェュージョン！！E—HEROマグマネオス！！マグマネオスはお互いのソウルのカード一枚につきパワー+1000だ！」

アイチのソウルは1だが十代は5枚、よって6000パワーが上がり、もともとは11000なので17000になり、バーストレディのブーストで24000。アイチは防ぎきれずダメージチェックに入る。

「トリガーなし……僕の敗けです……」

「そんな落ち込むなよアイチ！お前はもつともつと強くなる。強くなった姿を俺に見させてくれよ？」

「はいっ！！」

「ガツチャ！楽しいファイトだったぜ！」

十代とアイチのファイトは十代の勝利で終わるのだった。

HERO VS 光の騎士団（後書き）

次回はミサキVS遊星で行きたいと思います

星の絆VS占術魔法団

アイチと十代のファイトが終わり、次は遊星とミサキの番なのでお互いに「テッキをシャッフルしていた。

「俺の名前は不動遊星だ…『テッキはほしぐす』というクランを使つている」

「私は戸倉ミサキ、ほしぐす何で聞いたことないな…まあ前の一人みたいに強いんだろうけどね」

遊星とミサキは簡単な自己紹介をしてテッキからカードを一枚裏向きに置いて叫んだ。

「「スタンダップ→ヴァンガード…」」

「俺はスター・ライトロードにライアード…」

「私は神鷹一拍子にライアード…」

(スター・ライトロード…一体どんなスキルを持つているんだろ？
あんなドリゴン見たことない)

遊星がライアードしたコニッシュは白い体に白い羽を携えて体にはまだ星屑を纏っているドリゴンだった。

「スターダストによく似てるぜ」「十代がスター・ライトロードをみていった。

「相手が何であれ、全力で行くよ！私のターン！ドロー、神鷹一拍

子のスキル！デッキの上からカードを5枚めぐり、その中に三田円の女神ツクヨミがあればライドできる……」

ミサキは「テックの上から5枚めぐりその中の一枚を手に取り叫ぶ。

「三田円の女神ツクヨミ！ライド！…そしてターン終！」

「俺のターン！俺はスピードウォリアーにライド、そしてスターライトロードのスキル！他のほしぐすがこのユニットにライドしたとき、このユニットを手札に戻す！そしてスピードウォリアーのスクリ！スピードウォリアーが場に出たターンの終了時までスピードウォリアーの攻撃力は倍になる！」

スピードウォリアーのパワーは7000なので14000となる。

「スピードウォリアーでツクヨミをアタック！」

「ノーガード」

「ドライブチャック、ゲットドロートリガー！パワーをスピードウォリアーに、そして一枚ドロー！」

ミサキに1ダメージを「え遊星はカードを一枚引く。

「ターンarend」

（こいつやつぱり強い！）

「私のターン！三田円の女神ツクヨミのスキル！デッキの上からカードを5枚めぐりその中の半月の女神ツクヨミにライドできる…。」

上からカードをめぐり、その中のカードを手に取り微笑む。

「時の流れは止められない、月は必ず満ちていくもの！ライド、半月の女神ツクヨミーそしてツクヨミのスキル！ソウルに神鷹一拍子、三田川の女神ツクヨミがあるとセソウルチャージできる」

デッキの上のカードを2枚半月の女神ツクヨミの下に置いた。

「そしてレッディアイをホールしてレッディアイでアタック！！！」

遊星のダメージゾーンにカードが1枚送られる。

「そしてツクヨミでアタック！！」

「受けたやる！」

「ドライブチョック、トリガーなし… ターン終了！」

遊星のダメージが2となつた。

「俺のターン！俺はスタードライブドライブゴンにライド！！そしてチューナーユニット、ジャンクシンクロン、チューニングサポートーをホール！！」

「やるのか遊星！」

「やります遊戯さん！俺はジャンクシンクロンのスキルを発動！！！ジャンクシンクロンと星屑のユニット一体をソウルに送る！」

ジャンクシンクロンの姿が消え光の輪となる。

「ジャンクシンクロンはジャンクシンクロンとほじくずのコニッシュアーティストをソウルに送り、エクストラデッキのジャンクと船のつぶゴーットをホールまたはライドできる！…」

「な…！？」

「集いし星が新たな力を呼び覚ます！光さす道となれ！！現れる、ジャンクウォリアー！…！」

遊星のリアガードに紫色の戦士が現れた。

「これが俺の絆の力、シンクロユニットだ！そしてジャンクウォリアーのスキル、ソウルのジャンクと名のつくユニット1体につきパワー + 1000だ！」

ジャンクウォリアーのパワーは10000、ソウルのジャンクは1体なのでパワーは11000となる。

「さらにチューイングサポートーのスキル！チューイングサポートーがシンクロの素材となつたとき、デッキからカードを一枚引く。ジャンクウォリアーでレッドアイをアタック！－スクラップフィスト－！」

「ぐつ…！」

「スタードライブドラゴンのスキル！スタードライブドラゴンがアタックするときパワー + 2000だ！そしてアタック！」

「Eアラーマーでガード！」

「ドライブチョック、ゲットスタンドトリガー！ジャンクウォリアーをスタンド…さらにパワー+、そしてアタックだ！スクラップフイスト！」

「ノーガード」

ミサキのダメージも遊星と同じことなった。

「私のターン！あんた凄いね、とても初めてとは思えないよ」

「そりや遊星は遊戯さんと同じデュエルチャンピオンだからな」

またまた十代の発言に驚かされるQ4のメンバー達。

「ますます負けたくないなつたよ。私も行くよ！半月の女神ツクヨミのスキル！デッキの上からカードを5枚めぐりその中の満月の女神ツクヨミライドできる…！」

ミサキはカードをめくるが今回はなかった。
だが手札から

「その微笑みで世界を照らせ！ライド満月の女神ツクヨミ！ツクヨミの後衛にお天氣お姉さんみるくをコール、さらにオラクルガードアンライズマン、ジエミーをコール！そしてワイズマンでジャンクウォリアーをアタック！…」

ジャンクウォリアーがドロップした。

「みんなのゲースト！ツクヨミアタック！！」

「ノーガードだ」

「ツインドライブ、ファースト…セカンド…トリガーはなし」
遊星のダメージは3になりミサキは手札にグレード3しかこなかつた。

「俺のターン！俺も行かせてもらひ。『トブリドライブ』をホール！」

「グレード3にライドしないか？そのままじゃツクヨミは敵わないよ？」

「俺のデッキにはグレード3はない……」

「…………えつ？」

全員驚いた。グレード3がないとはほとどど勝てないと同じだからだ。

「デッキにはいない…デッキにはな

「まさか？」

「ああ、俺はさうにスターダストシャオロンをホール！そしてデブリドライブのスキル！こいつもジャンクシンクロン同様でこいつとほじぐくのユニット一体をソウルに送る！そして！」

「遊星のホールスだ！」

遊馬はまだ見たことがないので見たくてウズウズしている。

「集いし願いが新たなる星となるー光さす道となれー！飛翔せよ、スター・ダスト・ドラゴン！」

「これが……スター・ダスト・ドラゴン、遊星のHース…」

ミサキはスター・ダスト・ドラゴンの美しさに見とれてしまった。

「スター・ダストの後衛にマッシュ・ウォリアーをホールー！そしてアタック！」

マッシュ・ウォリアーのパワーは7000、スター・ダスト・ドラゴンのパワーは10000なので17000となる。

「ノーガード」

「ツインドライブ、ファースト…セカンド…ゲット、ダブルクリティカルトリガー！効果は全てスター・ダストに」

ミサキのダメージが一気に5になつた。

（危なかつた…けど次は私が攻める！）

「私のターン！アマテラスをコール、その後ろにジェミニを！そしてツクヨミのスキル！カウンターブラスト2でデッキからカードを2枚引き、1枚をソウルに、そしてもう一度」

（これで十分）

「アマテラスでスターダストドラゴンをアタック！！」

「ノーガード、ゲットドロートリガー！手札を一枚増やしパワーをスターダストに」

「ツクヨミでアタック！！」

「ぐず手のかかしでガード！手札を一枚捨てて完全防衛」

「ツインドライブ、ファースト…セカンド…ゲットクリティカルトリガー！効果は全てワイズマンに！そしてワイズマンでアタック！」

「スターダストファンтомでガード！」

スターダストファンтомはクリティカルトリガーでシールドは1000。

「ターン終了」

「俺のターン！俺はセイヴァードラゴンとチューニングサポーターをコール！セイヴァードラゴンもチューナーコニッシュだ！」

遊星はまたシンクロをやるつもりなのだ。

「セイヴァードラゴンとチューニングサポーターをソウルに送り、集いし星の輝きが新たな奇跡を照らし出す！光さず道となれ！！光らせよ！セイヴァースタードラゴン！…セイヴァースタードラゴンのスキル！ソウルにスターダストドラゴンがあるとき、パワー+1000！」

セイヴァースタードラゴンの攻撃力は11000なので12000となる。

「そして手札を一枚捨て、相手のコートと同じスキルを得る…」

「…な…!?」「…」

「サブリメイションドレイン！アマテラスのスキルをもらい！ソウルチャージ、そしてデッキ確認！そしてスタードライブドラゴンをコール！セイヴァースタードラゴンのアタック！…」

「じょこりで完全防御！…」

ミサキはこのターンを防ぎ切ればなんとかなると思つていたが覆されてしまった。

「それを待つていたんだ！！セイヴァースタードラゴンのスキル！このユニットのアタックが相手のガーディアンのスキルでヒットしなかつたとき、カウンターブラスト3で相手のリアガードを全て退却させる…！」

「なんだって…！」

ミサキのリアガードが全て退却してしまった。

「そしてツインドライブ！ファースト…セカンド…ゲットドロートリガー！効果はスタードライブドラゴンに！そしてスタードライブドラゴンでアタック！」

「サイキックバードでガード…」

何とか防ぎ切れたがミサキの手札にはグレード〇がほとんびだった。
(「だから勝つのは辛い……」)

「セイヴアースターダラゴンはターンの終了時にエクストラテック
に戻りスターダストドラゴンとなる。ターンエンド」

「私のターン！このターンで勝つ、メテオブレイクウィザード、コ
ロをホール！そしてアタック！」

しかし遊星はその全ての攻撃を防ぎ、ミサキのツインドライブでは
トリガーはこなかつた。

「俺のターン！クイックシンクロン、スターライトコードをホール
！そしてスターライトコードとクイックシンクロンをソウルに送り、
集いし星の輝きが新たな速度の地平へ誘う！光さす道となれ！！希
望の力フォーミュラーシンクロン！」

「遊星、このターンで決めるな

遊戯はファイトの終わりを悟り、櫂も同じく感じていた。

「フォーミュラーシンクロンのスキル！ヴァンガードがスターダス
トドラゴンのとき、このユニットをソウルに送り、集いし夢の結晶
が新たな進化の扉を開く！光さす道となれ！！アクセルシンクロ！
生来せよ！シューティングスターードラゴン！…」

どうやらこの世界にきて遊星はクリアマインドを発動しなくてもシ
ューディングスターを出せるようになつたようだ。

「シューディングスターードラゴンのスキル！カウンタークラスト2

でデッキの上からカードを5枚めぐりその中のチューナーコニットの数だけアタックがヒットしたときスタンドできる…！だがツインドライブは失うけどな

そういうながら遊星はカードをめくる。

「テツキよ…… 答えてくれ！…… 来た！」

遊星がめぐつたカードは全てがチューナーコニットだった。

（一方的じゃない……）

ミサキは軽く絶望する。

「シュー・ティングスター・ドラゴンでアタック！！スター・ダストミラージュ…！」

シュー・ティングスター・ドラゴンの攻撃力は11000、マッシュブウオリアーのブーストを受けてパワーは18000。

「ビクトリー・メイカー、ばにらではガード！」

（これでトリガーが来なければ…）

「ドライブチェック、ゲットクリティカルトリガー！スター・ドライブ・ドラゴンにパワー+5000！そしてアタック！」

結局ミサキは遊星のアタックを防ぎ切れず負けてしまったのだった。

「戸倉なかなか面白かった、またファイトをしよう」

「次は負けないからな…」

遊星とミサキは再戦の約束をして後の一人に場を渡すのだった。

星の絆VS占術魔法団（後書き）

次は遊馬VSカムイです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2376z/>

カードファイトヴァンガード～イメージと絆を繋ぐ物語～
2011年12月19日19時51分発行